

受	2	コ	シ	こ
賞	0	ン	ョ	と
作		ク	ー	ば
品	2	ー	ト	ら
集	3	ル	シ	ん
			ョ	ど
			ー	
			ト	

目次

ごあいさつ	町田市長	石阪丈一	4
ごあいさつ	審査員長	田丸雅智	6
ごあいさつ		遠藤龍之介	7
受賞作品			
名探偵アスパラガスと秘伝のソース	岩澤尚吾	9	
ピクルス	菊池章太郎	12	
果てしない旅	斉藤葉音	14	
神隠し	高橋結衣	18	
暗躍者は爪を立てる	櫻井文香	22	
時空間ピストル	楠本柚月	26	
サリーの寄り道	大塩陽菜	29	
おじさん構文	伊藤凜	33	

町田市長 石阪 丈一

今年で三年目を迎えた「ことばらんどシヨートシヨートコンクール」は、これまで最多の一〇〇二作品をご応募いただきました。多くの子どもたちが熱心に文芸創作活動に取り組んでいることを心から嬉しく思います。

今回は、町田ゆかりの小説家・遠藤周作氏が生誕一〇〇年を迎えたことを記念して、「遠藤周作賞」を設けました。遠藤氏は子どもの頃から詩や作文が得意で、小学生の時に、詩が新聞に掲載されたそうです。子どもたちにとって、本コンクールが文学と触れあうきっかけとなれば幸いです。

今回の受賞作品は一二作品で、食べ物にまつわるものが五つありました。「名探偵アスパラガス」や料理の名前が題材の「プロヴァンスの春」、「歯車牛乳」に「ピクルス」、そして「からあげが実る木」。タイトルだけでも興味を惹かれますが、どの作品も不思議な食べ物が効果的に生かされています。他にも身近なペットをモチーフにした幻想的な作品や、メールで使われる絵文字の秘密を解き明かしたものなど、日頃から皆さんが興味をもっているであろう事柄を題材にした作品も受賞して

います。また、町田を舞台にした作品は四つあり、町田を知り尽くした子どもたちならではの内容になっています。

残念ながら受賞とはならなかった作品にも、アイデアに富む力作がたくさんありました。これからも多くの子どもたちにショートショートを通して、想像の世界で豊かな心を育んでほしいと思います。そして、町田生まれの作家が育っていくことになれば、これほど誇らしいことはありません。

最後に、作品の審査及びコンクルールの運営にご指導・ご協力いただいた審査員の皆さま、コンクルールの運営にご協力いただきました東京町田・中ロータリークラブの皆さま、子どもたちの指導にご尽力いただきました学校の先生方や保護者の皆さまに厚く御礼申し上げます、ご挨拶の言葉といたします。

審査員長 田丸 雅智

今回も一〇〇二作ものたくさんのご応募を本当にありがとうございました。審査ではみなさんの豊かな想像の世界に触れ、とても刺激的な時間を過ごさせていただきました。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

アイデアの種はここではないどこかにあるのではなく、身の周りにいくらでも転がっているものです。ショートショートに親しむようになると、そのさまざまなアイデアの種に気がつきやすくなり、日常がキラキラと輝きはじめます。コンテストへの挑戦を通じて、みなさんの日常もそんなふうになっていけばと願っています。そして、見つけた新しいアイデアで、ぜひまた作品を書いていってほしいと思います。

ショートショート創作は楽しいだけでなく、文章力や発想力、論理的思考力など、生きていく上でとても役立つ力の育成にもつながります。このコンクールをきっかけに、引き続きショートショート創作に励んでいただければうれしいです。

（あいさつ）

フジテレビジョン取締役副会長 遠藤 龍之介

今回各賞を受賞なさった皆さんおめでとございます。私も拝見しましたがどの作品もレベルが高くてびっくりしました。最近子供の本離れや文章力低下が言われていますがこと町田市にとってそれは無縁のようです。

父の名前を冠して頂いた「遠藤周作賞」二作はいずれも夢とファンタジーに溢れた魅力的な作品です。大人になってもこの豊かな感性を失わずにいて頂きたいと切望する次第です。

受
賞
作
品

名探偵アスパラガスと秘伝のソース

岩澤 尚吾

昔々、ロンドンという大都市にどんな難事件も解決できる名探偵として知られるアスパラガスという男が住んでいました。ある日、ロンドンの街に不可解な事件が起きました。人々の大切なソースが次々と姿を消しているのです。

アスパラガスは事件の報告を受け、すぐにその場所へ向かいました。街の中心にある豪華なレストランで、貴重な秘伝のソースが盗まれていました。アスパラガスは冷静な観察力を駆使し、現場の証拠を調査しました。

彼はレストランの床に残された、にんじんでできたナイフに注目しました。どこかで見たことがあるような気がしました。アスパラガスは「ベジタブル」というメーカー名が刻まれたそのナイフを販売しているのはベジタブルストアだけだということに気付きました。

次の日ベジタブルストアの防犯カメラを確認していると黒い服を着た肉厚ビーフがニンジンナイフを手に取りました。彼はくっひもを結び、入り口へと向かっていききました。

肉厚ビーフの後を追っていくと、彼はロンドンの裏路地にある古い建物の中に入っ
ていきました。アスパラガスはその建物に足を踏み入れ、狭い階段を上りました。
すると、そこに肉厚ビーフの姿はなく、ほのかに肉汁のにおいがするだけでした。

アスパラガスは慎重に部屋を調査し、壁に仕掛けられた細い穴に気付きました。
その穴を覗くと、下には隠された通路が広がっていました。彼はその通路を進み、
やがて地下の洞窟にたどり着きました。そこには大量の鍋が積み重ねられているの
が見えました。

アスパラガスは驚きながらも、突然現れた影に気付きました。肉厚ビーフと仲間
たちが、アスパラガスを取り囲んでいました。そして奥から彼らのリーダーである
怪盗和牛がゆっくりと出てきました。

アスパラガスは巧みな話術と分析力で、怪盗和牛たちに事件の真相を語りました。
彼らは何年も前から自分達がおいしくなるためにソース泥棒を繰り返していました。
けれどその裏には苦しい過去があることも判明しました。

アスパラガスは怪盗和牛たちの悲しい気持ちを理解しました。彼は街の人々と一
緒に新しいソースをつくる方法を提案しました。そして、洞窟をきれいにして、新
しい秘伝のソースをみんなで作ることにしました。

怪盗和牛たちは街の人々と友達になりました。アスパラガスのおかげで、事件は解決し、新しい絆が築かれたのでした。

こうして、名探偵アスパラガスの知恵と優しさによって、ロンドンの街に平和が戻ったのです。

そして、それからというものの、アスパラガスの名前はより広く知れ渡ることになり、おいしい和牛のステーキのそばにはアスパラガスが添えられるようになったという事です。

もちろんみんなで作った秘伝のソースをかけて。

ピクルス

菊池 章太郎

——開発者の福神助さんに来ていただきました。福さん、よろしくお願ひします。

「二九六二年八月二十一日の今日、新商品、その名もピクルスの発売を決定いたしました。本商品は、漬け物を泳げるようにするために——」

「なあなあ、今度これを使った漬け物を水槽に入れて観察してみよーぜ、えーと値段は……」そう言いながらあさひはスマホで値段を調べ始めた。曰く、ピクルスの値段は一パック五百円弱、五パック入りの箱は二千円程度だそうだ。

「ちよつと買ってくるわ。また明日な。」そう言うにあさひは僕の家を飛び出して、近くのスーパーに買いに行つた。

翌日、家から水槽とピクルスを持ってきたあさひは僕の家へ来た。そして僕とあさひは実験を開始した。ピクルスを沢庵にふりかけて水槽に入れると元気よく泳ぎだした。沢庵は切るか切らないかで泳ぎ方が変わった。沢庵を切るとイワシのように群れをなして泳ぐし、切らなければイルカのように泳いだ。沢庵だけでなく、柴漬けやキムチにもピクルスをかけて水槽に入れた。しばらくの間、何事もなく

漬け物たちが泳いでいたので、僕たちは昼寝をすることにした。しばらく寝ていたらあさひの声が聞こえた。「水の色が変わってる！」僕も慌てて飛び起きてみたら水の色が赤紫になっていた。あさひは水を舐めると「しょっぱえ」と言った。漬け物たちがずっと水に浸かっていると味や色が抜けて水に溶け込んでいるみたいだ。

——あとになって池や湖で漬け物が泳いだため日本の湖などが海になっていることが分かった。もしかしたら海の水がしょっぱいのは何万年も前に漬け物が大きい湖で泳いでいたからなのかもしれない。

果てしない旅

芥藤 葉音

今は西暦二千二百三十年。人類が起こした最期の大戦争から約二百年経つ。最初は小さな国同士での戦争であったが、小さな国を助けている国も次々に参加し、気が付けば世界中を巻きこんだ第三次世界大戦へと発展していった。相手国を完全に滅亡させようとお互いに持っているほぼすべての核爆弾を使ったからか戦争をしている国だけでなく、世界中の人々が核の被害に合い、地球上のほぼ全ての人や動物が死に、限られた一部を除いた全ての都市や土地が汚染されてしまった。

生き残った人々は過ちを反省し、とにかく生きていくことを最優先とした。幸いにも、残っていた地域は暖かく、人類の最期を予想した賢い人がいたため、百年間での文明の進歩はすばらしいものとなった。例えば、医学は進歩し病気はほぼなくなり、汚染された地域で多くの実験ができたおかげで宇宙技術も発展し、宇宙船を完成させた。しかし、その百年間の間も汚染がどんどん進み、人類が地球を離れなければならぬ時が来た。

その後の約百年間の間、人間は宇宙空間の旅を続けて、住むべき星を探している。

百年間は長い時間であるが、宇宙の時間では全くそうではない。地球を離れてからというもの、まだ住めそうな星はなく、この先もしばらくはない。ただ、あのまま残っていてもいつかは地球が滅亡するのは分かっていたので、外に行くしか手段がなかった。

宇宙船での生活は悪くない。食べ物も豊富だし、運動する場所も十分にある。人類が持っている全ての知識にすぐにアクセスできるので、学校にいかなくてもいい。私の仕事はこの広い宇宙空間から人類が住めそうな星をいち早く探すこと。正直なかなか見つからないが、よさそうな方向は決まっていますので、今は毎日そのあたりを探し続けている。うまくすればもうすぐ見つかりそうだ。いや、間違いなく見つかると思う。

「船長、船内の確認終了しました。五番ブースの管にて異常があったのですぐ修理いたしました。」「ご苦労。行先のない旅はまだまだ続くから、くれぐれも大切な脳たちに十分な酸素が行くように監視を続けておいてくれ。」「もちろんです。いつか見つかる星を目指して、一万个の脳は常にAIで監視しています。」

実は私には体がない。もちろん、手もないし、足もない。あるのは脳だけ。核爆弾の環境汚染がひどく、被爆をした人類は、体の機能がおかしくなってしまった。

また、放射能汚染がひどく、食料を育てることがとても難しくなってきた。そこで脳だけをクローンで増やし、十分な栄養と知識を与え、人類は生きながらえてきた。船長の体はロボットで、見た目は普通の人間と何も変わりはない。しかし、脳以外はロボットなので、病気もしないし、痛みも感じないし老いることもない。脳に十分な栄養がとどけば、それでいい。顔も体も好きなように選べる。いいことしかないように思えたが、一つ大きな問題があった。体を失うと同時に、人類は感情を失った。なぜかは分からないが、悲しくもないし、怒ったりもしない。甘えたくもならないし、ぐちも言ったりしなくなった。私たちはただ仕事をするだけでよくなった。

とうとうその日は来た。住めそうな星が、みつかったのだ。私がずっと監視していた方向から地球に似た星を見つけた。十分な光と酸素があり、気温も問題なさそうだった。水も十分にあり、植物が生存していたが、動物らしきものは生存していない様子だった。百年以上さがしてきたものが、あと少しで手に入りそう。さっそく報告したいと思ったとたん、なぜか今まで経験したことのない感覚を受けた。なんと表現していいかわからないが、とても不思議な感覚だった。この感覚を受けた後、私はなぜか星の発見を報告することをしなかった。つまり誰にも発見したこ

とを言わなかった。そして、あの発見から千年経ったが今でもこの船で地球人は漂っている。地球に似た星を見つけられたのは私だけじゃないはずなのに、いまだに人類は宇宙の中をさまよっている。

この時期の恩田川沿いは賑やかだ。

カメラの前でピースをする中年の女性、寄り添うように佇む老夫婦。小さな子供を抱き上げる父親と、両手で枝を掴む娘。その様子を目尻を下げて見守る母親。ちび、と聞こえた鳥の声は僕の横を走り抜けた子供の笑声でかき消された。

咲き乱れる花の中に、ふと、見慣れた後ろ姿を見つけた。長い黒髪を揺らして歩く、水色のブラウスの彼女は間違いなく。

「佐倉先輩！」

思わず彼女の名前を呼ぶ。振り向いた先輩は僕を見て目を丸くし、それから花開くように微笑んだ。

「橘くん」

優しい声が耳に届く。僕は胸を高鳴らせながら彼女のそばへと駆け寄った。

佐倉先輩。明るくて可愛い、僕の女神様。

この辺りに住んでいると言っていたけれど、まさかこんなところで会えるなん

て！

桜の木の下で立ち止まった僕たちの間を風が通り抜ける。隣に立つ彼女をこっそり窺うと、風に揺れる長い髪の毛先が頬にかかり、甘い香りが鼻腔を刺激した。なんて綺麗な桜なんだろう。

ぼんやりと先輩を見つめていると、不意に彼女がこちらを見た。ぼつちりと目が合ってしまった、慌てて目を逸らす。空の青と雲の白、春色の光を映し煌めく恩田川。その水面に触れてしまいそうなほど枝を伸ばした桜は満開で、これ以上ない花見日和だった。

視界の端で彼女が口を開くのが見えた。

「ね、橘くんは桜好き？」

大好きです。あなたみたいだから。胸の中からぼろっと生まれた言葉をぐっと抑えて言葉を紡ぐ。

「えっと、好きです。綺麗なんで。先輩は桜好きですか？」

「私はね、苦手」

こっちのほうが好きよ、と付け足し、先輩は植込みに咲く橘色のツツジをつつく。日陰に入った彼女の、風に揺れた白いスカートに黒い桜模様の影が差した。

「桜ってね、神様が憑依する木だって言われてるの。稲作の神様の倉。だから桜」
そう呟く先輩の瞳には、胸が苦しくなるほど綺麗な薄紅色が映っている。彼女の口紅と同じ色。その瞳に映るのは僕だけでいいのに。形の良い唇からまた音が溢れる。

「満開になると大人も子供もみんな浮かれておかしくなっちゃうでしょう？ それこそ、神様に誑かされるみたいに。私は、何かに囚われたくない。狂いたくなんかない」

だから苦手、と笑う先輩が、どこか遠いところへ行ってしまうそうだと思った。彼女は一步も動いていないというのに。ちらりと見えた川面は、風に煽られさざ波が立っていた。キツキツというカワセミの声がやけにはつきりと聞こえて、慌てて口を開く。今から僕が言うことは、その、桜の神様に誑かされたと思って聞いてください。

「案外、誑かされるのも悪くないですよ。優しくて綺麗な花だから。囚われてしまってもいいかな、なんて」

先輩の視線が僕の目を捕らえる。吸い込まれてしまいそうなほど澄んだ瞳に、今度こそ僕だけが映った。

「僕は桜が、佐倉先輩が好きです」

今しかないと思つて、半分勢いで言い切つた。

驚いたように目を見開いた後ふわりと笑みを浮かべた彼女は、今まで見たどんな桜よりも美しかった。

「そっか」

彼女はゆっくりと僕のほうへと歩み寄る。一步、二歩。

「橘くん、わたしに、桜に攫われてよ」

両手を差し出し満開の笑みを浮かべる彼女の言葉にしっかりと頷き、その手をぎゅつと握り、はい、と答える。花嵐が吹いた。びゅうびゅうと走り抜けていく空気に、薄紅とも白とも言えない淡い色彩が混ざり合う。

あまりの強風に思わず目を閉じて、開く。気づけば真つ暗なところに一人佇んでいて、なに、と呟いた。

「君が言ったんじゃない。桜に誑かされるのも、囚われるのも、悪くないんでしょ？」

どこからか、女性の声が聞こえる。覚えてるのは満開の桜と、誰かの手の温もりだけ。

暗躍者は爪を立てる

櫻井 文香

「十時をむかえてすぐ、ターゲットがやってくる。赤いロングスカートの女と、白地に青いたてじま模様の服の男だ。狙い目なのはやはり女だと推測している。あと五分ほどで時間だ」

「了解」

「爪は手入れしておけ」

「了解」

音声が止まる。私は、ふうと一息ついて、今いる高台から辺りを見渡す。私の付近にはだれもいないようだ。ここなら、少しくらい気を抜いてもいいだろう。

私は――あまり深くまでは語れないのだが――今の日本人、いや、世界中の人類に足りていない“例の物”を取り扱う組織の、特別な訓練を受けた者のみが集まる部隊に所属している。良い意味なのか分からないが、私はその部隊の数少ない貴重なメンバーらしい。確かに、先ほど指令を出していたU（仮名）の仕入れた情報だと、部隊の中でも、瞬発力と跳躍力は私が堂々のトップ成績なんだとか……。

でも、家族にはもっと足の速いやつだっているし、跳躍なんて私は苦手意識すら持っている。部隊の仲間達と会ったことはないが、にぶいやつらなんだろうと思っ
ている。もしこれをU（仮名）に言ったら、幹部に密告されるだろうから、心の中
にとどめておく。

「おっ、来たな」

話し声が遠くから聞こえる。ざっと二十人ほど。ターゲットの二人をその中から
探し出さなくてはいけない。背伸びをして、様子をうかがう。

人の姿が見えてきた。子供もいる。

（赤いロングスカートの、白地に青いたてじまの服……）

あっ、いた。あの二人だ。

こちらに向かって歩いてくる。

ラブラブな様子はない。初デートといったところだろう。仕事しがいがある。私
は先ほどからずっといた高台から、下に降りて、だんだんと近くに歩み寄る二人を
見る。女の方はこちらを見つめ返し、男になにかささやいている。

私は心の中でつぶやく。いつもターゲットに対してかけている言葉を。

「『愛』を生み出す掛け橋になっていきますように」

そして私は、ターゲットの女のロングスカートに飛びかかった。

「キヤア!!」

「どうした!?!」

「リスがこっちを見つめてきてて、かわいいなあと思って近づいたら、スカートに飛びかかってきたの……」

「えっ、大丈夫?! けがしてない?」

「うん。スカートにリスの爪のあとがついちやっただけど、ありがとう。気を使ってくれて」

「そう、なら良かった。それにしても、町田さんって、こういう所好きなんです。少し意外でした」

「ここらへんで育ったからね。小動物、好きだし。いつもながめるだけなんですけどね」

「初デートで来るくらいだし、好きなんだろうなあって。僕も動物好きなんです。しかもリスが大好き! こんないいスポット教えてくれてありがとうございます」

「どういたしまして。……でさあ、石倉くんって、今日の午後も空いてる?」

「……？はい」

「昼ごはんどこかで食べて、またここ来ない？一緒に、リスにごはんあげたいなあ
って思ってた」

「え、いいですね。行きましょう！リスって何食べるんでしょう？楽しみですよ！」

「ヒマワリの種を食べると思うよ。あと、わたしにはタメ口ね、今から。一応……
付き合っているし」

「は、はい！あ、間違えた、うん！」

「よし、じゃあ決まり！リスの爪には注意だよ！」

ターゲットの二人は、昼ごろに一度ここを去ったが、しばらくしてまたもどってきた。先ほどより仲が良さそうに見える。私はそれを確認し、物影にかくれる。そして「任務成功」とU（仮名）に報告し、私は爪の手入れを始める。次なる任務のために。

四年前の今日、一羽のオカメインコを迎え入れた。独特で愛らしい姿と、穏やかな性格。ぴよんと生えてるアホ毛のような冠羽に、美しい毛並みの翼。「ポッ」と頬を赤らめたような模様は、きつと神様のユーモアだろう。それが秋のあたたかい夕日に似ていたことから、彼女を「もみじ」と名づけた。

髪のをを啜えて引っ張っては、肩にのぼってくる人懐っこさが本当に可愛かった。立派な羽を持つ割に飛ぶのが下手でよく壁に当たっていたが、人間関係に悩んで落ち込んだ日に静かに飛んできて寄り添ってくれたこと、その優しい感触まではつきりと覚えている。小学六年生の十月から今まで、確かにそばにいたのだ。

そのもみじが姿を消した。家に帰って部屋に入ってふと、いつもなら感じるもみじの気配がないことに気がつく。鳥かごを見ると扉が開いていて、中は空っぽだった。同時に、窓の隙間が目に入る。それを見るや否や、体は勝手に家を飛び出していた。声が枯れるまで名前を呼び、靴の踵を踏んだまま必死に走り続けた。思えば今朝、「いってきません」と頭を撫でた後の閉めが甘かったのかもしれない。ちゃんと確

認ただらうか。そんなことは覚えていない。なぜなら今日は本当になんでもない今日だったのだ。たわいもない一日だったのだ。そんな今日、この世で一番の理解者を失おうとしている。

その瞬間、額に冷たい金属のようなものが当たる感覚があった。現状の異様さから少しずつ足取りが重くなり、荒い呼吸は静まっていく。目の前の景色は変わっていないのに、ただ残り続けるその感覚が恐怖を生んだ。体温を忘れ、あまりの恐ろしさに震えていると、ふともみじのことを思い出す。肩をすぼめ小さく彼女の名前を呟く。すると、はじけるような銃声が響き渡り、景色は一変した。

そこに映し出されているものは夢や幻のようだが、作り物とも思えない。未知の現世であった。秋の美しい紅葉が広がる山奥のようだ。そこに、見慣れた一羽のインコが飛んでくる。それは確かにもみじだった。枝の先に止まり、クリクリと辺りを見回してから、出会った当初一生懸命教え込んだ歌をうたいはじめる。肩の力が抜けて、堪えていた涙がどっと溢れ出てきた。柔らかい信号機色の中で音色を響かせるもみじは、本当に愛おしかった。だが、もう手を伸ばすような真似はしない。もみじは、永遠の別れよりやさしい最期を贈ってくれたのだ。キラキラと遠退いていく光景と歌声：鮮やかな木々に消えていくもみじを、見えなくなるまで眺めてい

た。その景色がいつの間にか部屋の天井になったところでハッとする。急いで鳥かごを確認した後、深い溜息をつくど、額から何かが床に舞った。

それは頬のように赤い、一枚のもみじの葉であった。後の、思い出のトリガーであった。

サリーの寄り道

大塩 陽菜

家の近くに新しいレストランができた。名前は「サリーの寄り道」。今日のランチはサリーへ行こう。私はお気に入りサイズの大きなリボンがついたコートを羽織り、家を出た。

茶色い大きなドア。その前に小さな看板があった。メニューと書いてあったその看板には「プロヴァンスの春」とだけ書かれていた。プロヴァンスの春とは一体どんな料理なのだろう。私は興味津々で目の前の大きなドアをそつと開けた。

いらっしやいませと言う声は聞こえてこなかった。誰もいない。店内は薄暗く、寂しい感じだった。小さなテーブルと椅子がいくつもある。私は、入口から一番近い席に座った。

座った後、私はすぐに後悔した。薄暗い店内に一人。やっぱり帰ろうか、今ならそつと出ていけば大丈夫。私は、できるだけ自然に後ろを振り返った。その時、「いらっしやいませ。」低い声だった。男の人かな。前を向くとおじさんが立っていた。

「お食事の準備をしてもよろしいですか。」

丁寧な口調だった。良かったあ。私は少しほっとして、「はい、お願いします。」と答えた。そういえば、メニューにあったプロヴァンスの春とはどんな料理だろう。私は忘れていたメニューのことを思い出した。好き嫌いは特にならない。だから、どんな料理でも美味しく食べられる。私は食べることが大好きだ。

運ばれてきたのは大きな鍋が一つ。スープかな。雪が降りそうなくらい寒い日だった。店の人が、「この紙に食べたいものを書いて鍋の中に入れてください。」と言いつ、紙とペンをテーブルの上に置いた。私は一瞬、何のことかわからず店の人、おじさんの顔をじつと見た。おじさんは、「どうぞご自由に」と言いつ、私が紙に書くまで待っていた。食べたいものと言われても今食べたいものはプロヴァンスの春、これしか思いつかない。

私は、鍋の中に紙を入れた。それを確認したおじさんが、「よろしいですか。では始めますよ。」と言いつ、鍋を持ち上げ指の上でくるくると回し始めた。私は、何が始まったかよくわからないままおじさんの指と鍋を見ていた。鍋は勢いよく回り、何回転もして止まった。そしてその鍋は、そつとテーブルの上に置かれた。「少し、テーブルから離れてもらえますか。」おじさんが言った。そして今度は両手をあげ「い

きますよ！」と言った。何かが起こる、そう思った私はおじさんの手から目が離せなかった。「さあ、いきますよ！」と言った二度目、おじさんが鍋の蓋をあけると、ぼわっと大きな火が鍋から飛び出てきた。うわっ、と思った瞬間、

「お待たせしましたあ。」明るく元気な声が出た。振り向くと、オリーブ色のエプロンをした女の人が料理をもって立っていた。

おじさんはもういなかった。

「プロヴァンスの春です。熱いので気をつけてくださいね。」女の人が笑顔で言った。私は、「ありがとうございます。」と言い、一緒に出されたおしぼりで手を拭いた。久しぶりにとてもドキドキした。

料理から爽やかないい香りがした。ハーブかな。白いボウルの中には色とりどりの野菜とチキンが入っていた。もう少し冷めるまで待とうかな。店内は変わらさず薄暗かった。よく見ると、テーブルも椅子もアンティークでお洒落だ。壁の柄はよく見えないけれど、ところどころレンガ風になっていた。そのレンガ風の壁のあたりから、小さな光が少しずつ私に近づいてきた。光は、ひとつ、ふたつ、みつつ、いくつもあった。何だろう、そう思った時、

「こんにちは。」優しい声だった。いつの間にか私はその小さな光に囲まれていた。

「きれいでしょ。」そう言ったのはおばあさん。小さな光の正体はキャンドルだった。「大変お待たせいたしました」と言ってまた女の人がやってきた。隣には、おじさんもいた。明るくなった店の中に、キャンドルを持ったおばあさんと、女の人とおじさんがここにこしながら立っている。

戸惑う私に女の人が言った。

「地元でレストランを開くのが夢だったの。でもね、このおじさんが子供の頃から憧れていたマジシャンになりたいって、さらにおばあさんが最近キャンドルアーテイストになりたいって言うの。面白いでしょ。私がレストランをやるって言っているの。もう、みんなのやりたいを一つにしたらこんなお店になっちゃった。」

女の人の胸にはサリーと書いたバッジがついていた。楽しそうな人たち。とても温かかった。春だ。そうだ、私もこれからもっと寄り道しよう。その前に

「プロヴァンスの春、いただきます。」

おじさん構文

伊藤 凜

日曜の昼下がりに、私、松崎アカリは大学時代の友人のサキと、卒業後初めて会っていた。

「久しぶりだね。サキ、ちょっと痩せたんじゃない？ 仕事きついのか？」

「そんなことはないよ。アカリはどう？」

「私はだいぶ慣れてきたかな。職場の人たちもみんな優しいし。」

その時、私のスマホが鳴った。父からのメールだった。父は、一人暮らしを始めた私が心配らしく、毎日のようにメールを送ってくる。

「もう。お父さんが毎日メールしてくるよ。見て。」

「あ、その絵文字、うちの上司も使ってるよ。」

そういえば、うちの上司も使っているな。丸くて黄色い顔で、色んな表情がある絵文字。上司も父も、文末には必ずこの絵文字をつけている。便利なのはわかるけど、ここまでくるとちょっとださい。いわゆる「おじさん構文」てやつだ。

「なんでおじさんたちって、この絵文字使うんだろうね。若者は使わないよね。」

そんなくだらない話をしていると、時間はあっという間に過ぎ、私はサキと別れ、家に向かって歩いていった。今日の晩ご飯はどうしよう。何かお惣菜でも買ってしまおうかな。一人暮らしを初めてもう半年になるが、自炊にはまだまだ慣れない。でもよく考えたら、昨日作った煮物が残っている。ちよつと少ないけど、それでいいか。このままどこにも寄らず、まっすぐ家に帰ろう。そんなことを思っていたのに、私はすいこまれるように、黄色い顔の絵文字の看板がかかっている店に入ってしまった。

「すごいですね。また入っていききましたよ。」

地球の様子を見ている、二人の宇宙人がいた。

「この絵文字の睡眠効果は想像以上だったな。あの時、地球を滅ぼさなくてよかった。」

「と、言いますと？」

「君はこの仕事に就いたばかりだから、よく知らないのか。三十年前、我々は地球を植民地にしようと思っていたんだ。しかし、地球の代表者たちは、それを受け入れず、我々と戦おうとした。地球人を滅ぼすのは簡単だったが、我々も滅ぼしたい訳ではない。そこでちょうど開発されていた睡眠技術の実験台として、地球を使う

ことを思いついたんだ。」

「そうだったんですね。確かに、我々の星で実験するわけにはいかないですからね。しかも、実験は大成功。あの看板を見た地球人どもは、絵文字の催眠効果によって私たちの店を使わずにはいられないのだから。店は繁盛し、我々はいつまでも利益を得続けられる。一石二鳥ですね。」

「地球人にとっても、実験協力することで、元の生活を続けられるというメリットがあるからな。三十年前の約束に従って、元の生活を守るために、一日に使う絵文字のノルマを必死でこなしている人間がいるなんて、若い地球人どもは考えたこともないんだろうな。」

歯車牛乳

小山 あまね

歯車牛乳が発売されたのは今からちょうど半年前のことだ。歯車牛乳といっても、歯車乳業が作っている牛乳でもなければ、歯車でできていない牛乳でもない。これを説明するには更に二年前に遡る。それはニュースで発表された。「私達の心には歯車があります。」歯車というものは、私達の心を動かすもの。この歯車がうまく動かないと私達の調子も悪くなる。その調子を整えるのが歯車牛乳なのだ。そんな歯車牛乳は「一日一杯歯車牛乳！」のキャッチフレーズでまたたくまに売れていった。「これが歯車牛乳か。」中学二年生の由美子が歯車牛乳を手にとったのは発売から半年後のことだった。発売直後こそ品薄だった歯車牛乳だが、発売から半年も経つとコンビニの店頭で見かけるようになった。テストもあるし、普通の牛乳と同じ値段ならと由美子は歯車牛乳を購入した。次の日、歯車牛乳の効果はすぐに表れた。テストは由美子の苦手な数学だったというのに、スラスラと解けるのだ。応用問題は時間ギリギリで解けなかったものの、単純な計算問題などはほとんど解くことができた。(すごい。こんなに問題が解けるなんて！)その日から、由美子は毎日歯車牛乳を

一杯飲むようになった。大事なテストがある日、音楽や体育の発表があるとき。歯車牛乳はいつも予想以上の効果を發揮した。2月14日の朝、由美子は二杯分の歯車牛乳を飲んだ。何といっても今日は、由美子にとって一世一代の告白のチャンスなのだ。じつは、由美子は同級生の健一に片思いをしていた。なかなか告白する勇気が出ず悩んでいた由美子に訪れたのが今日、バレンタインだった。(絶対に告白を成功させてみせる!) 昨日から用意していたチョコをバッグに入れ、由美子は学校へと向かっていった。学校に着くと、由美子はある違和感を感じた。(私、なんで健一に告白しようとしたんだっけ?) 健一はほかの男子とは違い、物静かであり活発な方ではなかった。同級生は、陰キャだよーと避けていたが、由美子はむしろそこが良かったのだ。すぐにはからかったり、いたずらする男子と違って、落ちついていて頭もいい健一は理想、のハズだった。今落ちついて考えてみても、健一と由美子は趣味が合わない。付き合えたとしても別れてしまうかもしれない。(私って本当に健一が好きだったのかな?) 健一を好きだった由美子の気持ちは、すっかりなくなってしまった。もちろんチョコを渡す相手もいなくなる。(このチョコどうしようかな)「あ！」思わず声に出た。由美子の頭に思い浮かんだのは、同級生である陽太の顔だった。陽太はいつも由美子にアピールをしてくる。教室で「好きです！」と急

に告白してきたり、突然花束を持ってきたりとアピールの方法は様々だったが、どれも過剰なものであり由美子ほうんざりしていた。(でもそれって一途ってことだよ) 自分のために様々なことをしてくれるというのは由美子にとってもうれしいことである。さらに二人はしゅみが合う。(そういえば、今日は陽太がアピールにこない) 不思議に思いながらも、由美子はチョコの入った箱に書かれた名前を「陽太」に書きかえて、バッグに入れ直した。放課後、由美子は陽太を校舎裏に呼び出した。もちろん告白のためにだ。バッグからチョコを取り出し、由美子は口を開いた。「好きです！付き合ってください！」普段通りならすぐさまOKという言葉が聞こえただろう。だがしかし陽太の口から出てきたのは、それとは全く別の言葉だった。「ごめん、他に好きな子がいるんだ。気持ちだけ受け取るよ。」由美子のチョコを受け取って、陽太は去っていった。由美子は、暫くの間呆然としていた。次の日、由美子は一人、部屋で考えていた。もちろん昨日のことである。由美子は朝起きるとまるで昨日のことが嘘だったかのように気持ちが変わっていた。また、健一のことが好きになっていたので。すごく不思議な現象だったが、きっとバレンタインで緊張していたのだろうと由美子は結論づけた。だが、本当の原因は歯車牛乳にあった。実はこれには、二杯以上飲むと心の歯車が狂ってしまい、普段の気持ちも逆になると

いう副作用があったのだ。(また、次のバレンタインで頑張るかあ)由美子は早くも、来年のバレンタインに向けて計画を立て始めた。一方その頃、陽太も一人頭を抱えていた。「なんで告白断っちゃったんだろう…」何度も由美子にアピールしてきた陽太だが、昨日はなぜか同級生の実香に惹かれたのだ。告白されたときも実香のことを考えていて、つい断ってしまった。(本当になんでだろう、バレンタインだから張り切って歯車牛乳を二杯も飲んだっていうのに)

からあげが実る木

羽鳥 柚生

世の中では今、物の値段が上がっている。食べ物も値段が上がっている。

そんな時代の中、「家」では食費を抑えるため、ある一本の木を育てることにした。

それは「からあげが実る木」だ。そのまま木にからあげが実るだけだが、枯らしてしまうと腐る。だからさ、毎日ていねいに育てなければいけない。一本十万円するらしい。

今日は父、明日は母、と世話する当番を決める。美味しく食べるためには面倒臭いが頑張らなくては。

でも、毎日食べていると飽きる。毎晩食卓にからあげがある。母は「少しでも食費を抑えたいの。我慢して食べなさい。」という。

確かに、家のためではある。だけど三百六十五日夜ごはんにはからあげが出るのは嫌だ。と、思っていた次の日にとんでもない事件は起こった。

朝、父が木を見に行くと、木が枯れていた。

「おい、木を枯らしたヤツは誰だ。」と、父は怒鳴った。父は、私の弟をにらんだ。

昨日の当番は、私の弟だ。弟は「そうだよ。僕が木を枯らしたよ。」と言った。父も母も、怒りながら枯れて腐った木を処分した。

でも私は正直嬉しかった。やっとこれだからあげを食べなくて良い。弟も怒られながらもニヤニヤしている。きつと嬉しいんだ。

昼間、弟とおつかいに行った。木を枯らした件について聞いてみたら、弟もからあげに飽きたから枯らしたそう。二人で嬉しくなりながら、家に走って帰った。

家の庭をチラッと覗いたら一本の木が立っていて、枝の先に「とんかつ」がたくさん実っていた。

かいじゅうのまち

小林 花穂

よなかにぼくのへやのドアをトントンとたたく音がした。

ぼくは、すこしこわかったけどゆっくりドアをあけてみた。

すると、そこには、大きなかいじゅうがいた。

「きみはだれ？」とぼくは聞いた。

「ぼくは、この町のかいじゅうだよ。きみをあんないしてあげる。」とかいじゅうは言った。

ぼくは、かいじゅうと手をつないだ。かいじゅうの手は大きくてふわふわだった。

かいじゅうがぼくをつれていったのは、シバヒロだった。

「ここ知ってるよ。よくあそんでる。」とぼくは言った。

「ぼくも知ってる。」とかいじゅうは言った。

ぼくは、シバヒロのしばふとかいじゅうのおなかのふわふわは、なんだかにているなあと思った。

つぎは、町田えきでん車を見にいった。

「リニアカーも早く見たいね。」とかいじゅうが言った。

ぼくは、すこしつかれたのでかいじゅうのせなかにのった。せなかのしまもようは、でん車の線ろにているなあと思った。

つぎは、きれいな花が咲いているいけに行った。

「ここも行ったことがあるよ。花きれいだね。」とぼくは言った。

かいじゅうは、

「ぼくは、大むかし一人ぼっちできみしくて大なきしたんだ。これはぼくのなみだがたまっていけになったんだよ。花がさいたらみんなが見にきてとでもうれしかった。」と言った。そこに小さなリスたちがいっぱいやってきた。

「あっしょうかいするよ。ぼくのなかまたち。すぐ近くにすんでいるんだ。」とかいじゅうは言った。リスのふわふわとかいじゅうのふわふわはいっしょだなあ、とぼくは思った。

「そろそろじかんだね。」と言ってかいじゅうは、ぼくをへやまでおくってくれた。

「つづきはまたこんど。おやすみ」とかいじゅうはかえった。

ぼくたちは、もしかしてかいじゅうの上にすんでいるのかなあと思いながらねむった。

あさになっておかあさんが、

「よなかにグオーグオーっていう音しなかった？」と言っていた。

それは、かいじゅうのいびきかも、とぼくは思った。

夢のまた夢

華井 陸斗

二一XX年、町田に新たな市長が誕生した。彼は目標として様々なことを掲げた。例えば「町田市内で起こるすべての事件をなくす」や「町田に観光客がたくさん来るようにする」といったものだ。それらは市民たちにとって無謀以外の何物でもなかった。しかし、彼はそんな市民たちの反応をよそに世界中から有名な学者や教授を集め、大量の資金をつぎ込んだのだった。

そして就任から一年後、開発チームが発足した。

「君たちには私の理想を実現するための物のある物の開発にご協力いただきたい。その名も『夢のまた夢まくら』だ！ その枕を使って寝ること、夢のまた夢と言われるような驚くべきことを夢で見て、それが実際に起こるような仕組みだ。我々は就任から一年程でこの現象の仕組みを調べ上げた。あとは製作するのみだ。」

「しかし市長、あとは製作するだけならば我々を使わなくてもいいじゃないですか。自分たちの研究があるんですよ。」

「残念ながらこの仕組みは非常に難解で、とても我々の手には及ばなかったのだ。」

そこで君たちに協力してもらおうことにしたんだ。もちろん出来上がった暁には君たちに莫大なお金を払おうと思うがね。」

その言葉で目の色が変わった学者や教授たちの協力によって、これまで難航していた製作作業は急速なスピードで進み、わずか三ヶ月で終わった。市長は手放して喜んだが、すぐさま真剣な顔つきになり、「これから早速私が寝てみようと思うよ。」

と言った。チラホラと文句は出たものの、結局市長が寝ることになった。大勢の人たちの前で市長は床に入った。

「では、おやすみなさい。私が目覚めたとき、町田がどうなっているか楽しみだね。」市長は笑みをうかべると、すぐさま夢の世界へと入っていった。

その夢の中で市長はにわかには信じがたいものを見た。町田には超大型の商業施設が立ち並び、遊園地や動物園などもできていた。観光客とみられる人は大勢いて、町田は活気に満ちあふれていた。その様々を眺めていると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「……………ください。」……………ください。」

「市長起きてくださいー！」

「んん……。もうかい？　で、何が起こったのか？」

「何か起こったのか？　どころじゃないですよ市長！　ついさっきから市内で超大型の建造物がいきなり、大量に作られ始めて、観光客も殺到しているんですよ！　すぐさま対応策を練りましょう！」

その後も市長が夢を見るたびに、それが現実に起こった。犯罪が起こらない平穏な一日の夢を見たら、それから犯罪が全く起こらなくなった。政策がことごとく成功した夢を見たら、現実でも上手くいき、支持率はうなぎのぼりだった。

その日の夜も市長は例の枕を使って寝ていたのだが、酷くうなされていた。市長は、町田にUFOが現れ、誘拐されるといふ夢を見ていたのだ。もちろんあの枕を使っているのだから現実に……

その後の市長の行方を知っている者は誰もいなかった。

受
賞
作
品
一
覽

市長賞

小学生の部

「名探偵アスパラガスと秘伝のソース」

岩澤 尚吾

(町田市立南成瀬小学校

六年)

中学生・高校生の部

「ピクルス」

菊池 章太郎

(町田市立町田第二中学校

一年)

教育長賞

小学生の部

「果てしない旅」

斉藤 栞音

(町田市立南成瀬小学校

六年)

中学生・高校生の部

「神隠し」

高橋 結衣

(和光高等学校

二年)

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

小学生の部

「暗躍者は爪を立てる」

櫻井 文香

(町田市立町田第二小学校

六年)

中学生・高校生の部

「時空間ピストル」

楠本 柚月 (和光高等学校 二年)

審査員賞

小学生の部

「サリーの寄り道」

大塩 陽菜 (桐蔭学園小学校 四年)

中学生・高校生の部

「おじさん構文」

伊藤 凜 (町田市立鶴川第二中学校 三年)

ことばらんど賞

小学生の部

「歯車牛乳」

小山 あまね (町田市立町田第五小学校 六年)

中学生・高校生の部

「からあげが実る木」

羽鳥 柚生 (町田市立真光寺中学校 二年)

遠藤周作賞

小学生の部

「かいじゅうの町」

小林花穂

(町田市立忠生第三小学校 二年)

中学生・高校生の部

「夢のまた夢」

華井陸斗

(町田市立鶴川第二中学校 二年)

審
查
員
講
評

「名探偵アスパラガスと秘伝のソース」（岩澤尚吾）

アスパラガスの探偵、消えたソース、肉厚ビーフ、怪盗和牛など、じつにユニークな設定と言葉のチョイスに魅了されました。にんじんでできたナイフや、ほのかに漂う肉汁のにおいなど、細部にまでお話を盛り上げる工夫がこらされていて、お見事です。今の現実世界につながる、そして物語で語られてきたソースにうまく掛かった結末にも、うなりました。

—— 田丸 雅智

「ピクルス」（菊池章太郎）

ピクルスというネーミングや、沢庵、柴漬け、キムチという漬物のチョイスがユニークで、非凡なセンスを感じました。イワシやイルカのように泳ぐ沢庵の映像も愉快です。ラストで池や湖へと空間的に拡大していくことに加え、太古の海へと時間的にも拡大していき、その視点の移動のさせ方とスケールの大きさもとても魅力的でした。

—— 田丸 雅智

「果てしない旅」（斉藤葉音）

ずっと探していたものが見つかった時、人はどんな感情になるのだろうか。

物語の解釈を読者に委ねるような、素敵な余韻の残るラストがとても印象的でした。一万个の脳や、五番ブースの管など、細かいディテール設定がされているところも物語にリアリティーを感じさせることに貢献していたように思います。

—— K E N T H E 3 9 0

「神隠し」（高橋結衣）

恩田川の桜の美しさが、ストーリーだけでなく耽美な文体で表現されています。読んでいて心地いいリズムと細部の言葉選びが光っていました。匂いや風を感じる巧みな情景描写です。桜の儂さがキャラクターにうまく投影されていて、とハッとするようなラストの余韻も味わい深かったです。

—— 藤岡みなみ

「暗躍者は爪を立てる」(櫻井文香)

ギャップが最高です。前半は一貫してハードボイルドな雰囲気を作り上げ、その後反転して一気に微笑ましい展開で畳み掛けているところが楽しいと思います。タイトルもセンス抜群。後半がほとんど会話で構成されていることで展開が客観的に転がり、最後まであくまでリス目線で終わるところもよかったです。

—— 藤岡 みなみ

「時空間ピストル」(楠本柚月)

物語の冒頭、大切なものを無くした喪失感が強く伝わってきて、実際に作者の方がこの経験をしたのでは？と思わせるほどでした。そしてそれがあったからこそ、引き金がかかれた後の描写は切なく美しかったです。短い文章で物語をしっかりと書ききれていたところも良かったです。

—— K E N T H E 3 9 0

「サリーの寄り道」（大塩陽菜）

「プロヴァンスの春」という料理名と、あやしげなお店の雰囲気に着かれ、
どんだん読み進めていきました。手品やキャンドルに主人公と同じように
翻弄されつつ、明かされた事実がじんわり温まります。お店を開くに
あたったのサリーさんの寄り道と、料理を食べるまでの主人公の寄り道を
通して、寄り道というものの持つ豊かさを感じさせてもらいました。

—— 田丸 雅智

「おじさん構文」（伊藤凜）

よく聞く「おじさん構文」に着目した発想にうなり、じつは地球を救うため
に絵文字を使っているのだという秘密にもドキッと思いました。「おじさん構
文」という言葉はネガティブな文脈で使われることが多いですが、本作を
読んだあとにそれに触れるとポジティブな気持ちになるはずで、物事のと
らえ方をよい方向に変換してくれる逸品でした。

—— 田丸 雅智

「歯車牛乳」（小山あまね）

タイトルを見た瞬間から興味を惹かれる「歯車」と「牛乳」という言葉の組み合わせ、またその効能の設定がとてもユニークでした。心の歯車がうまく動いた時の描写や、ストーリーの運び方など丁寧で、とても楽しく読むことができました。

—— KENTHE 390

「からあげが実る木」（羽鳥柚生）

一見ポップな世界観ですが、実は絶妙なバランスで皮肉がきいています。救世主のようにやってきた家電が実は不便で結局割高になったり、好きだと思っただけの子どものために準備したものが本人的にはうんざりだったり。そんな実体験と重ねて読みました。語りすぎずコンパクトにまとまっていて、現代の寓話のようです。

—— 藤岡みなみ

「かいじゅうの町」（小林花穂）

町田をかいじゅうに例えた心温まるファンタジー作品。ふわふわな手触りが伝わって、心が撫でられているような読み心地でした。かいじゅうの涙が池になったというのも美しくして神話のよう。オチのおちやめさといい、全体的な世界観作りがとてもお上手だと思いました。

—— 藤岡 みなみ

「夢のまた夢」（華井陸斗）

夢が実現する枕がある、しかし見る夢はコントロールできないというアイデアが面白かったですし、舞台が町田だったのも話をユニークにしていると思いました。最後のUFOの展開も突拍子もないところが逆に夢っぽく感じられて、楽しく読ませていただきました。

—— KENTHE 390

プ
ロ
フ
ィ
ー
ル

審
査
員

審査員長 田丸雅智

ショートショート作家。二〇一一年に作家デビュー。代表作「海酒」は短編映画化されカンヌ国際映画祭などで上映された。現代ショートショートの旗手として、執筆に加え全国各地で創作講座を開催するなど幅広く活動。

審査員

K E N T H E 3 9 0

ラッパー。町田市出身。フリースタイルバトルで実績を重ね二〇〇六年にデビュー。二〇一二年から音楽レーベル「DREAM BOY」を主宰。国内外でのライブのほか、TVやラジオへの出演、楽曲提供、音楽監修など幅広く活動。

審査員

藤岡みなみ

エッセイスト・ラジオパーソナリティ・ドキュメンタリー映画プロデューサー。時間SFと縄文時代が好きで、読書や遺跡巡りって現実にあるタイムトラベルでは？と思う二〇一九年からタイムトラベル専門書店を始める。

実

施

概

要

「ことばらんどシヨートシヨートコンクール2023」実施概要

主 催 町田市民文学館ことばらんど・町田市立図書館

協 力 東京町田・中ロータリークラブ

応募資格 町田市在住・在学の小・中・高校生

募集期間 二〇二三年七月一日～九月二〇日

募集作品規格 ショートシヨート作品

四〇〇字詰め原稿用紙一～五枚

賞 市長賞

教育長賞

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

審査員賞

ことばらんど賞

遠藤周作賞

審査員 田丸雅智

審査員 K E N T H E 3 9 0

審査員 藤岡みなみ

応募件数

一〇〇二編 小学生 四〇四編

中学生 五五二編

高校生 四六編

ことばらんどショートショートコンクール2023受賞作品集

発行日 二〇二四年五月一日

編集・発行 町田市民文学館ことばらんど

〒一九四―〇〇一三

東京都町田市原町田四―一六―一七

電話 〇四二―七三九―三四二〇

刊行物番号

24―8